楊仁山と小栗栖香頂（四）

――特に『念仏圓通』を通して――

中村　薫

周知の如く『念仏圓通』は、大きく四門に別れている。

第一　源空上人小伝

第二　選択本願為宗

第三　弁菩提心差別

第四　随難別解

このうち第四門は、二十一章の項目を立てて述べられている。そこでは諸々の疑難が発せられ、その一つ一つに解釈が加えられるのである。その各章は、先に明らかにした『評選択集』における十四項目の批判と重複している部分も多い。[1] ただそこでは小栗栖香頂の回答はなかったので、今回『評選択集』の楊仁山の批判を再度確認しながら、二十一章それぞれ考察していきたいと思う。[2] 更に今回は、小栗栖香頂亡き後、龍舟（俗姓内記）が『念仏圓通

続貂[3]』（その後、楊仁山は論争を打ち切っているので、龍舟に対しては答えていない）を著しているが、それを閲覧する機会を得たので、それも参考にして補足したいと思う。

第一章　経意に合す

楊仁山は、かつて南條文雄より恵贈された浄土真宗の七祖聖教を閲読して、頗る経意と反することが多く感じられ、南條文雄のところへ批判の文を送っている。南條文雄は、直接楊仁山に返答せずに、それを小栗栖香頂に託すのである。小栗栖香頂は、楊仁山の疑問に対して、謙虚に答えていくのである。

先ず小栗栖香頂は、楊仁山の『選択本願念仏集』（以下『選択集』と称す）の疑問に対して、

> 已に前に於いて第二門第三門で之を弁ず。再び贅せざるや。居士の難、頗る高弁に肖る、然るに高弁は其れ讒謗に極む。居士の言は従蓉にして迫せず。其れ仁人君子と為すを失せざるなり。
>
> （已於前第二門第三門弁之。不再贅焉。居士之難、頗肖高弁、然高弁極其讒謗。居士之言従蓉不迫。不失其為仁人君子也。）

と、既に第二門「選択本願為宗」、第三門「弁菩提心差別」で述べたので再び答えることはしないが、それにつけ

ても居士の批判は明恵上人高弁によく似ているというのである。

もともと高弁は、法然在世の時は法然を大変尊敬していた。ただ法然の死後、『選択集』を読んだ後、邪見に満ち満ちていると激しく法然批判を展開するのである。そこで『摧邪輪』を著し、「菩提心を撥去する過失」「聖道門を以て群賊に譬える過失」の二項目について批判を述べ、さらに『摧邪輪荘厳記』を著して補足までしている執拗さである。

それに対して、居士の批判は寛容であり、人を誹ったり、理攻めで迫るようなことはない。小栗栖香頂は、「さすがに人格豊かな仁者の心構えをお持ちで、君主の器を失うものではない」というのである。少し慇懃無礼の感がしないわけではないが、小栗栖香頂は、「一代経中、天台の五時八教、華厳の五教十宗、法相の有空中三時教、真言の顕密二教十住心は、すべて違教として罵るべきでないなら、道綽の聖道浄土も罵ってはならないであろう」というのである。

これに対して楊仁山は、少し面倒くさいような感じで、「もうそのことは、『評陽駁陰資辨』第六で明かしているので重ねて述べない」と再び駁論するのである。その第六とは、

栖君但聖道を知らざるに非ず、亦復浄土を知らざるなり。大いに凡そ浄土を闡揚せん者は、須からず浄土の因の何たるかを知り成ずべきなり。既に大経を以て真実と為し、豈に法蔵比丘の仏に白して言うことを見ざるや。我れ無常正覚の心を発し、菩提心に非らざれば、何ら大願を発こせるや。後の修行の文中の自行の六波羅蜜は、

人を教え行ぜしむなり。経文を彰彰と考えるべし。證して弥陀の報土は皆因に修行するに聖道を成就することを得ると知れば、奈何ぞ定めて聖道を捨することを要せんや。修行を判せん者は、邪定聚と為し化土に生まれる。修行せざる者は、正定聚と為し報土に生まれる。顚倒謬乱なり。此甚となすこと莫なれ。豈に日々経文を持誦し、循行に墨を数えるも、全て義を解せざるや。　（『楊仁山居士遺著』第十一冊・十九帖右）

（栖君非但不知聖道、亦復不知浄土。大凡闡揚浄土者、須知浄土因何而成。既以大経為真実、豈不見法蔵比丘白仏言。我発無常正覚之心、非菩提心而何発大願後修行文中自行六波羅蜜、教人令行。経文彰彰可考。證知弥陀報土皆因修行聖道而得成就、奈何定要捨聖道。判修行者、為邪定聚、生於化土。不修行者、為正定聚生於報土。顚倒謬乱、莫此為甚。豈日々持誦経文、循行数墨、全不解義耶。）

の文である。

楊仁山は、どこまでも聖道の行が大切であると主張するのである。浄土の因そのものは、大経に明らかである。菩提心に依らなければ、どうして大願を起こすことができるのか。弥陀の報土にを得るには、聖道を成就することである。だから聖道が明らかにならない限り、浄土も明らかにならないのである。なのにどうして聖道を捨てるというのかというのである。修行した者が邪定聚として化土に生まれ、修行できない者が正定聚を得て報土に生まれるということは、全く本末転倒であり、謬乱そのものであると非難するのである

すると小栗栖香頂は、

均しく是れ観経なり。天台は之を以て、為に心観を宗と為し、実相を体と為すと。之を罵って違教と為すべからざるなり。善導之を以て、為に念仏観仏を宗と為し、往生浄土を体と為すと。之を罵って違教と為すべからざりなり。本宗は善導に依り、誰か善導を以て違教と為さんや。好相感見の証する所、一僧指授の禄する所なり。須く之を尊信すること仏経の如くなるべし。

（均是観経也。天台以之為心観為宗、実相為体。不可罵之為違教也。善導以之為念仏観仏為宗、往生浄土為体。不可罵之為違教也。本宗依る善導、誰以善導為違教乎。好相感見之所証。而一僧指授之所禄。須尊信之如仏経也。）

と述べるのである。

小栗栖香頂は、それは『観無量寿経』（以下『観経』と略す）に依っているからであるというのである。故にあくまでも善導法然の教義が特別なものではなく、天台華厳などの教義と同等であるというのである。即ち、天台の一心三観の宗学も、一念三千の教学も実相を体としていることは周知のことである。善導も『観経』により、念仏観仏を宗学として浄土往生を体と為すと主張し、それら全て仏の教えに基づいたものというのである。

楊仁山は、

疏を以て経を輔するも、疏を以て経を掩せざる。之れ慎むべし。之れ慎むべし

（以疏輔経、不以疏掩経。慎之慎之）　（楊仁山遺著所収『評小栗栖念仏圓通』三十帖右）

と再び駁論するのである。

楊仁山は、たとえ疏が経を補遺するものであったとしても、どこまでも疏は疏であって、決して経を掩蔽できるものではない。どうか慎んで経そのものを読んでほしいと、繰り返しいうのである。

それに対して、小栗栖香頂亡き後、龍舟が補足するのである。

試みに、龍舟は『念仏圓通続貂』（以下略）で、

本宗を按ずるに固より疏を以て経を輔す。何ら疏を以て経を掩すや。
（按本宗固以疏輔経。何以疏掩経乎。）

と述べ反論している。

龍舟によれば、もともと、浄土真宗の伝統は、『観経』を以て指方立相の教としている。それは事を以て帰としているからである。しかし、それは聖道の諸経は理を以て帰と為すこととは不一である。天台は法華を以て『観経』を見、事を以て理に入ることにより、法華を以て『観経』を覆い隠してしまっているのである。それに対して、た

だ善導のみ浄土を以て『観経』を見ているのである。善導はその所以を「楷定古今」と説いている。故に浄土真宗では、『観経』の真実の意味は善導によって始めて顕かとなると受け止めている。なのにどうして之を以て掩ということがあり得ようかと反論するのである。

もともと親鸞は、主著『顕浄土真実教行証文類』（以下『教行信証』と略す）「教巻」の中で、

夫れ、真実の教を顕わさば、則ち『大無量寿経』是なり。（『真宗聖教全書』二・二）

（夫顕真実教者、則『大無量寿経』是也。）

と、『大無量寿経』（以下『大経』と略す）の一経をもって、本願念仏の説かれている真実の教としている。そして、『観経』と『阿弥陀経』（以下『小経』と略す）とあわせて「浄土三部経」としていることは周知のことである。

そこで『教行信証』を見てみると、『大経』は「教巻」一文、「行巻」七文、「信巻」一七文、「証巻」三文、「真巻」三文、「化巻」八文の計三十九文引用している。そして『無量寿如来会』二十二文、『平等覚経』八文引用している。それに対して、『観経』は、「信巻」一文、「真巻」一文、「化巻」二文の四文に引用されているに過ぎない。『小経』にいたっては、「化巻」一文の引用に過ぎない。ところが、善導『観経四帖疏』になると、「行巻」三文、「信巻」十七文、「証巻」二文、「真巻」六文、「化巻」十二文の計四十文が引用されている。

もとより引文の数だけが問題ではないが、少なくとも親鸞の『観経』理解に善導の『観経疏』が大きなウエイト

を占めていることに違いはない。そして、さらに注目されるのは、元照の『観経義疏』を七文、戒度の『観経義疏正観記』一文、嘉祥の『観経義疏』一文等の文を引用していることより見れば、中国・新羅仏教の『観経』理解も無視していなかったことが伺われる。それではなぜ親鸞は、『観経』より善導の『観経疏』を多く引用しているのであろうか。実は親鸞にとっては、法然の影響が大きかったのである。法然は善導を「遍依善導一師」と尊敬しているが如く、善導の『観経疏』をもって浄土宗を開顕しているといっても過言ではないであろう。そうすると『観経』を拠り所とした善導・法然と親鸞の教学的伝承は、楊仁山が理解できないのも当然かもしれない。親鸞の教学は、決して経を蔑ろにしているのではない。しかし、楊仁山の指摘の如く、疏（『観経疏』）によって経（『観経』）の真意を明らかにしていったことは紛れもない事実である。

第二章　聖道浄土

法然は『選択集』で、道綽禅師の聖道浄土の二門のうち、聖道を捨てて浄土に帰すと述べていることは周知のことである。(4)

それに対して、楊仁山は、龍樹も道綽も「捨」ということは説いていないというのである。聖道浄土は一にして二であり、二にして一であるので、分けること自体が間違いであると主張するのである。

斯かる点を踏まえて、小栗栖香頂は、聖道浄土の二門について解釈を加えるのである。

まず小栗栖香頂は、

此の捨の一字、上人の浄土宗を開く所以、聖道各宗の外なり。

（此捨一字、上人之所以開浄土宗、於聖道各宗之外也。）

と述べ、まさしくこの捨の一字こそが大事であって、もしこの捨の一字を排除してしまえば、浄土宗の教義は、聖道浄土が混沌とし、不明不了のままに埋没してしまう。捨の一字を以て、天下万世の標準となることを知らなければならないというのである。

楊仁山は再び、

暗に法を滅するの機を蔵す。

（暗蔵滅法之機。）

（前掲『評小栗栖念仏圓通』三十帖右）

と駁論するのである。

試みに龍舟は、

法を滅するの機を蔵すとは、則ち天台慈恩賢首亦法を滅するの嚆矢なり。恐らく此の理無し。

（蔵滅法之機、則天台慈恩賢首亦滅法之嚆矢也。恐無此理。）

と反論している。

龍舟によれば、廃立の説よりすれば、浄土教だけでなく、諸宗に悉く法滅の機はあるというのである。華厳の五教はただ円教をとり、天台の四教は先ず三教を廃し、慈恩の三時は前の二時を減らし、それぞれ不了義としている。法然も廃して、「捨」としているのであるから、楊仁山のいう道理は成り立たないというのである。

つぎに小栗栖香頂は、

龍樹之れ難易を判ずるや。時に像の始めに属す。尚能く難行を行ずる有り。故に聖道の傍ら浄土を明かすのみ。道綽の時、末法の始めに属す。聖道難行、行ずべからず。故に断断として之を捨つる。

（龍樹之判難易。時属像之始。尚有能行難行。故聖道之傍明浄土耳。道綽之時、属末法之始。聖道難行、不可行也。故断断乎捨之。）

と、聖道浄土の難易二門が説かれる理由について述べている。

周知の如く、龍樹在世の時代は、凡そ仏滅後五百年頃である。正像末の三時観よりいえば、像法の始めである。

故に難行を修行することも可能な時代であったので、聖道を傍らに浄土を明かすのみであった。然るに道綽の時代に入ると、末法の始めであり、聖道の道を歩むのは難行の難であったので、心を決して聖道を捨てて浄土に帰したのである。つまり、小栗栖香頂は聖道浄土の二門に正像末の三時に合わせて理由付けしているのである。

楊仁山は、

既に能行せざるに、又何ら必ず捨と言うや。（前掲三十左）

（既不能行、又何必言捨。）

と、仏道を能行することがないのになぜ「捨」というのかと、再び駁論するのである。

試みに、龍舟は、

既に能行せざることを按ずれば、捨てざるは何の為か。

（按既不能行、不捨何為。）

と、つまり「捨」というより、「あなたはなぜ不捨というのか」と反論するのである。

つぎに小栗栖香頂は、『選択集』に引用されている『安楽集』（『真宗聖教全書』一・四一〇）の、

その聖道の一種は、今の時証しがたし
（其聖道一種、今時難証）

の文と、『大集月蔵経』[5]の、

我が末法の時の中に億々の衆生、行を起し道を修せんに、未だ一人も得る者有らじ。
（我末法時中億々衆生、起行修道、未有一人得者。）

の経文を改めて引証して、聖道の習修し難きことを述べ、道綽の聖道を捨てたことの論証としている。

楊仁山は、

これらの語句、均しく是活機にして、後学を策励するの言なり。　（前掲『評小栗栖念仏圓通』三十帖左）
（此等語句、均是活機、策励後学之言也。）

と、『大集月蔵経』の説を認めつつ、この言葉は後に学ぶ人にむち打ち励ますようなものであると、再び駁論するのである。

試みに龍舟は、『安楽集』の、

第一大門の中、教興の所由を明かして、時に約し機に被らしめて勧めて浄土に帰せしむとは、若し教、時機に赴けば、修しやすく悟りやすし。若し機と教と時と乖けば、修し難く入り難し。是の故に『正法念経』に云わく、「行者一心に道を求むる　時、常に当に時と方便とを観察すべし。若し時を得ず、方便無くば、是れを名づけて失となし利と名づけず。何となれば、若し湿へる木を攢りて以て火を求めんに、火得べからず、時に非らざるが故なり。若し乾きたる薪を折りて以て火を覓めんに、火得べからず、智無きが故なり」と。是の故に『大集月蔵経』に云わく、「仏滅度の後の第一の五百年には、我が諸々の弟子、慧を学ぶこと堅固なることを得ん。第二の五百年には、定を学ぶこと堅固なることを得ん。第三の五百年には、多聞・読誦を学ぶこと堅固なることを得ん。第四の五百年には、塔寺を造立し福を修し懺悔すること堅固なることを得ん。第五の五百年には、白法隠滞して多く諍訟あらん。微しき善法ありて堅固なることを得ん」と。

（第一大門中、明教興所由、約時被機勧帰浄土者、若教、赴時機、易修易悟。若機教時乖、難修難入。是故正法念経云、行者一心求道時、常当観察時方便す。若不得時、無方便、是名為失不名利。何者、如攢湿木以求火、火不可得、非時故。若折乾薪以覓水、水不可得、智無故。是故大集月蔵経云、仏滅度後第一五百年、我諸々弟子、学慧得堅固。第二五百年、学定得堅固。第三五百年、学多聞・読誦得堅固。第四五百年、造立塔寺修福懺悔得堅固。第五五百年、白法隠滞多有諍訟。微有善法得堅固。）

（『真宗聖教全書』一・三七八）

を引用して、『正法念経』[6]と『大集月蔵経』[7]の引文により、教、機、時の相応に関して反論している。

龍舟は、『安楽集』引文の『正法念経』（『座禅三昧経』）により、「薪と火」の関係の喩を以て「時と機と方便と智慧」の関係の大切さを説くのである。湿った木は火がつきにくいし、乾いた薪で水を得ようとしても水を得ることができない。時と機と方便と智慧が必要というのである。そこで更に『大集月蔵経』とにより、第一から第三段階までの各五百年の文をそれぞれ戒定慧の三学に配当し、第四段階より末法の時代にはいるとしている。そして、仏滅後の五段階の「第五の五百年には白法が隠滞して諍論が絶えないが、少しの善法有って堅固となる」という経説を引用して、聖道と浄土とが通じ合うことによって仏意を領くことができるというのである。ここで正像末三時により、聖道を捨てて浄土に帰す所以を説くのである。

そして、更に小栗栖香頂は、同じく『安楽集』の、

当今は末法、現にこれ五濁悪世なり。ただ浄土の一門のみありて通入すべき路なり。

（『真宗聖教全書』一・四一〇）

（当今末法、現五濁悪世。唯有浄土一門可通入路。）

の文を引用して、道綽が聖道を「捨」している所以を論証している。つまり、白光が両目を照らせば、盲者でなければ必ず浄土を見ることができるであろう。だから、一宗を開くことは、風が空気中に吹けば必ず旗幟を鮮明にせんと欲し、しかもその方針を知らせようとするはずであろう、というのである。

楊仁山は、

経意の在せられる所を顧みず、只人の観聴を動ずることを図って、新奇を出ださんと欲す。其の途甚だ多し。志那境内、数十種有りて未だ已せず。

（前掲『評小栗栖念仏圓通』三十帖左）

（不顧経意之所在、只図動人之観聴、欲出新奇。其途甚多。志那境内、有数十種而未已也。）

と、再び駁論するのである。

とかく人々は、経典の真意を顧みることなく、他人から聞いた事柄に傾倒し、新奇に教学を打ち立てようとしてしまいがちである。中国のあちこちでも数十種類の考え方があり、今でも終わっていないというのである。

試みに龍舟は、

綽師を按ずれば、豈に経意を顧みずして而も新奇を出すものか。

（按綽師、豈不顧経意而出新奇者乎）

と述べ、はたして道綽は経典の真意を顧みず新奇を出しているのであろうか、と反論するのである。

龍舟は、『大経』の、

当来の世に経道滅尽せんに、我慈悲哀愍を以て特に此の経を留めて止住すること百歳せん。夫れ衆生ありて斯の経に値う者は、意の所願に随いて皆得度すべし。（『真宗聖教全書』一・四六）

（当来之世経道滅尽、我以慈悲哀愍特留此経止住百歳。夫有衆生値斯経者、随意所願皆可得度。）

文を論拠とし、道綽は、『安楽集』[8]で、法然は『選択集』[9]で、それぞれ『大経』の文により、「取捨」の義を明らかにしているというのである。

つぎに小栗栖香頂は、楊仁山の主張する「聖道と浄土は一にして二、二にして一」の語句に関しては、「可なり」と述べて、善導の『往生礼讃』の、

諸仏の所証は平等にしてこれ一なれども、もし願行をもつて来し収むるに因縁なきにあらず。

（『真宗聖教全書』一・六五一）

（諸仏所証平等一、若以願行収来非無因縁。）

の文を論拠にして、聖道浄土の関係について述べるのである。

先ず「諸仏の所証は平等にしてこれ一なれども」については、

其の証せられる所を論ずれば、則ち聖道の証せられる所は亦真如なり。而も浄土の証せられる所は亦真如なり。是を二にして而も一と為すなり。然るに証するの門に異なるなり。此の土に入聖するを聖道と為し、他の土に証するを得るのを浄土と為す。是を一にして而も二と為すなり。

（論其所証、則聖道所証亦真如。而浄土所証亦真如。是為二而一。然能証之異門也。此土入聖為聖道、他土得証為浄土。是為一而二。）

と、諸仏の証りを所証と能証に分けて、聖道浄土の関係を唯一不二としているのである。

次に「もし願行をもつて来し収むるに因縁なきにあらず」については、

諸仏が証せられる所と雖も、平等にして是は一なり。然るに諸仏の誓願は各各別なりや。薬師の十二願を以て弥陀の四十八願と為すべからずなり。我が輩は弥陀の願力に乗じて浄土に往生し、而かる後、真如法性を証するなり。若し聖浄混淆し、朝に聖にして暮れに浄なり。其れ操すること二三にすれば、則ち此の土亦他の土を得ず、亦三途に沈淪して得ざるのみ。

（雖諸仏所証平等是一。然諸仏誓願各各別矣。不可以薬師十二願為弥陀四十八願。我輩乗弥陀願力往生浄土、而後証真如法性也。若混淆聖浄、朝聖暮浄。二三其操、則此土亦不得他土、亦不得三途沈淪耳。）

と述べるのである。

薬師と弥陀の誓願とは違う。自分は弥陀の誓願に乗託して浄土往生を願うのみである。聖道と浄土を混乱すれば、玉石混沌としたものになってしまうと忠告するのである。

それに対して楊仁山は、

栖君実に未だ嘗て聖道浄土の同別の源をしらざらんや。語語此の土に入聖するを聖道と為し、他の土に得証するを浄土と為す。此を尽く知られるや。豈に聖道とは、十方三世同行の道、娑婆極楽均しく、是の如く修証することを知るのみなり。仏が浄土門を説くは是れ退くを防ぐの法なり。弥陀の願力に仗り西方に往生す。永く退縁無く必ず成仏に至る、是れ以て浄土を専修すれば、即ち聖道門を円成するを得る。若し聖道を捨つるを唱すれば即ち是れ浄土を捨つるなり。蓋し、浄土は弥陀に由り聖道を修すれば成ずるなり。如来は善巧方便にして、或いは自身を説き、或いは他身を説き、或いは己事を示し、或いは他事を示し以て世俗の情見、固執不解にして、仏界に入らんと欲わば、不にして難なるや。　（前掲『評小栗栖念仏圓通』三十一帖右）

（栖君実未嘗知聖道浄土同別之源。語語以此土入聖為聖道、他土得証為浄土。所知尽於此矣。豈知聖道者、十

方三世同行之道、娑婆極楽均如是修証。仏説浄土門是防退之法。仗弥陀願力往生西方。永退縁無必至成仏也。是以専修浄土、即得円成聖道門。若唱捨聖道即是捨浄土。蓋浄土由弥陀修聖道而成也。如来善巧方便、或説自身、或説他身、或示己事、或示他事。而以世俗情見、固執不解、欲入仏界、不亦難哉。）

と、再び駁論するのである。

楊仁山は、小栗栖香頂に対して、「君はどうも浄土の同別の語句の源を知らないのではないか」というのである。あくまでも此土入聖（聖道）と他土得証（浄土）を知るべきであるというのである。十方三世の同行者は、娑婆極楽を共に修証することである。仏が浄土門を説くのは不退転を説いて、阿弥陀の願力により西方に往生することである。

斯かる浄土を専修することが聖道を円成することである。だから聖道を捨てたら浄土そのものが成り立たなくなってしまうのである。自他共に世俗の情見の中で仏の世界に入ることこそ重要である、と指摘するのである。

試みに、龍舟は、『安楽集』の、

問て曰く、菩提は是れ一なり。修因また応に不二なるべし。何が故に此に在りて因を修して仏果に向かうを名づけて難行と為し、浄土に往生して大菩提を期するを乃ち易行道と名づくるや。答へて曰く、諸々の大乗経に弁ずる所の一切の行法に、皆自力他力自摂他摂有り……略……此に在りて心を起し行を立て浄土に生ぜんと願

ずるは、此れは是れ自力なり。命終の時に臨みて、阿弥陀如来光台迎接して、遂に往生を得るを即ち他力と為す。

（『真宗聖教全書』一・四〇六）

（問曰、菩提是一。修因亦応不二。何故在此修因向仏果名為難行、往生浄土期大菩提乃名易行道。答曰、諸大乗経所弁一切行法、皆有自力他力自摂他摂。……略……在此起心立行願生浄土、此是自力。臨命終時、阿弥陀如来光台迎接遂得往生即為他力。）

の文を引用して、この文を難行易行を以て問い、自力他力で答えていると説明している。

もともと道綽は、菩提心そのものは一つであるが、我々の歩みのあり方に難行易行の二行あるというのである。因より果に向う難行を自力、浄土往生を願う易行を他力に配するのである。それは決して、難行自力が劣位に置かれているのではない。ただ気根拙い我々でも、菩提心をもって歩みやすい易行他力の教えがあることを示しているのである。そこで、自力聖道他力浄土を単純に分けるのではなく、じつは自力の中に願生浄土の語が存在するという意味を説明するのである。例えば、ある人が心を起こして行じて浄土に往生しようと願うことは難しいことである。それを自力といっているのである。だから、臨終に臨んで、ふたごころなく阿弥陀如来を念じて、往生を得ることを他力というのである。

龍舟は、

良医在らば則ち当然なり。若病む者ならば、謂く皆是薬なり。吐下し一斉に服去するは、則ち無乃揠苗之類か。故に吾は或いは聖或いは浄なり。各有縁の一法に由るのみなり。

（在良医則当然。若病者謂皆是薬。吐下一斉服去、則無乃揠苗之類乎。故吾或聖或浄。各由有縁一法耳。）

と述べている。

龍舟によれば、如来の善巧方便は、良医のようであるというのである。病人にとっては、すべてが薬である。しかし、早く病気を治すためといっても、その薬を闇雲に一度で多く服用すれば、逆に飲めずに吐いてしまうかもしれない。それでは薬の意味がない。ちょうど孟子[10]のいう、宋の人が苗の長くならないのを閔いて、早くのびるようにと抜き出して、結局枯らしてしまうようなものであるというのである。

故に龍舟は、無理をせず、聖道と浄土と共に等しく、各々有縁の一法に由るのみであるというのである。

聖道を捨てるとは、確かな浄土を得なければ捨てられないはずである。これまで何度も述べてきたが、聖道を捨てるとは、聖道を劣位に置いているのではなく、聖道の道を進めない凡夫の自覚道そのものである。それこそ浄土の道なのである。

以上で、第一経意に合す項、第二聖道浄土の項を終わる。以後は他日に記したい。

注

（1）『評選択集』の十四項目の一々については、拙書『中国華厳浄土思想の研究』（二〇〇一年・法蔵館）「第五章　楊仁山の日本浄土教批判」（二五二～三〇六頁）を参照されたし。

（2）今、小栗栖香頂の『念仏圓通』は、大谷大学所蔵の『真宗教旨　陽駁陰資辨全』（『念仏圓通』との合本による。奥書に明治三二年五月三〇日起草とある。真宗高倉学寮罫紙、両面二四行・四七枚、和綴じ、縦二七センチ横一七センチ）は、手書きではあるが、ト書きとして楊仁山の『評小栗栖念仏圓通』の文が書き込まれている。『念仏圓通』の小栗栖香頂の一々の出典箇所は略す。

（3）今、龍舟の『念仏圓通続貂』は大谷大学所蔵本（手書きであり、奥書に明治三四年十月、日本京都大谷本願寺大学寮掛よう飛州釋龍舟俗姓内記頓首とある）による。一々の出典箇所は略す。

（4）浄土聖道二門の詳細については、拙書『中国華厳浄土思想の研究』（二〇〇一年・法蔵館）「第五章　楊仁山の日本浄土教批判」の第一項聖道浄土二門（二六六～二七〇頁）を参照されたし。

（5）この『大集月蔵経』は、『大方等大集経』巻第五十五「月蔵分第十二分布閻浮提品第十七」（大正十三・三六三上）の取意文。

（6）『安楽集』引用の『正法念経』は現存せず、鳩摩羅什訳の『座禅三昧経』に「行者定心求道時　常当観察時方便　若不得時無方便　是応為失不為利……略……如鑽湿木求出火　火不可得非時故　若折乾木以求火　火不可得無智故」（大正一三・二八五下）とある。

（7）前掲『大方等大集経』（大正十三・三六三上）の取意文。

（8）『安楽集』巻下第六大門（『真宗聖教全書』一・四二七）参照。

（9）『選択集』上第六特留章（『真宗聖教全書』一・九五三）参照。

（10）孟子『公孫丑章句上』に、「宋人有閔苗之不長而揠之者。茫茫然帰、謂其人曰、今日病矣。予助苗長矣。其子趨而往視之、苗則槁矣。」（新釈漢文大系4内野熊一郎著『孟子』明治書院刊・九七頁）とある。